

蒙疆の「探検」と京城帝国大学

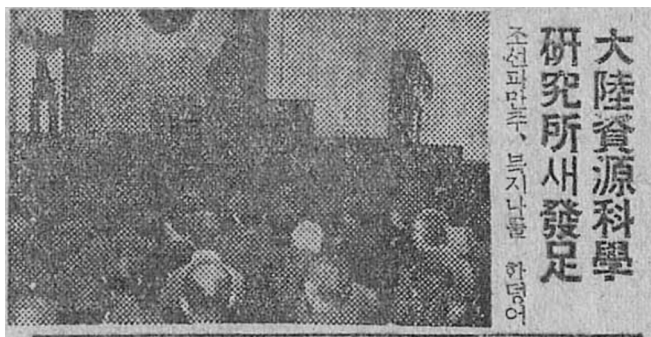
―京城帝大「大陸資源科学研究所」設置に関する予備的考察―

永島 広 紀

はじめに

第二次大戦も最終局面にさしかかった時期、一九四五年六月四日付けの勅令第三三六号によって、京城帝国大学に「大陸資源科学研究所官制」が發布され、同六月二十四日の午後に法文学部大講堂において開所式が挙行された。これによって京城帝大に二つ目の附置研究所が開設されることになった。

つまり、これに先立つ一九四二年五月二十六日に京城帝大は勅令第五四三号「高地療養研究所官制」に基づく結核治療機関を江原道平康郡東辺里に置いていた。また、朝鮮人参の産地として名高い京畿道開城府（雲鶴町・徳岩町）に「附属生薬研究所」（京城帝国大学官制の改正による学内措置、一九三九年二月二十七日設置）もすでに開設され、全羅南道の済州島には同研究所の支所として「済州島試験場」も置かれていた。ただし、これらはいずれも医学部の実験的な臨床部門を担うものであり、実質的には医学部の附属施設であった。



開所式の模様（『毎日新報』1945年6月26日付2面）

小文は特に第二次世界大戦／太平洋戦争の最末期、京城帝国大学に「大陸資源科学研究所」なる文理横断型の附置研究所が設置されたことの史的な意味を探索するための予備的な作業として起稿されるものである。

すでに、筆者は学術誌『九州史学』の特集「帝国大学の〈内〉と〈外〉」（二〇一四年）において、後発帝大における異分野融合を企図した研究が遂行される背景として、「法文」「理工」といった「複合学部」という後発性こそが、むしろ結果的に他の帝大に先行しえる優位さをもたらしたことから見通しを論じたことが

ある^①。

よって小論は、同特集でも取り上げた京城帝国大学に置かれた「大陸資源科学研究所」が官制化されるまでになされた様々な準備作業の中でも、とりわけ、朝鮮総督府学務局なり東京の関係官庁に対しての「実績作り」としての側面も無視できない「蒙疆調査」が実施される過程に遡ることによって、その設立に至る道程の一端を素描することをその目的とするものである。

「京城学派」と泉靖一

大陸資源科学研究所は、その所長に医学部教授（解剖学第三講座担任）の今村豊^②が補職されたように、人事的には医学部主導と見られかねない組織であった。ただし、後述するように、その実働メンバーには文化人類学者をはじめとする「法文学部」のスタッフも少なからず含まれており、また一九三八年四月十六日に設置（教員の着任と学部講義の開講は一九四一年四月以降）されたばかりの「理工学部」教員も加わるなど、「法文」「医」「理工」からなるコンパクトな学部構成を生かした、否、生かさざるを得ない布陣となっていた。

なお、右に述べた「文化人類学者」とは、つまるところ泉靖一（一九一五～一九七〇）のことに他ならない。彼の超人的ともいえる組織作りにおけるマネージメント能力なくして大陸資源科学研究所の構想が具体化しえなかったことは、関係者の回顧や、あるいは先行研究によっても等しく認められるところである^③。特に全京秀氏（元ソウル大学校社会科学大学教授）によって人類学における「京城（人類）学派」なる呼称

復活が提起されるとともに、泉靖一の業績についてもフィールドワークと文献の渉獵を踏まえた詳細なレポートが累次に公刊されている。

ただし、先行研究においては泉靖一の経歴や官職に関して、いささか混乱した記述も散見される。よって、まず彼の京城帝大における履歴を可能な限り復元することをもって、なぜ、泉が研究所の設置を推進したかという問いの前提を今一度確認しておきたい。

まず、兵役を終えた泉が大学に助手として復帰した際の配属先が「理工学部」であることに注目したい。学部長は海軍造兵中將の肩書も持つ山家信次であった。山家はこののち、一九四四年三月から第七代にして最後の京城帝大総長に就任する人物である。大陸資源科学研究所が設置されるまでには、まず大学執行部の理解を取り付けることが最も重要なことであるの言うまでもない^④。

また、泉靖一は、研究所設立の時点では、いまだ大学内の職階としては「学生主事」としてようやく高等官の仲間入りを果たしたばかりであり、助手以上・助教授未満（当時、講師は官制上には存在しない嘱託身分）の中間的な存在に過ぎなかった。

ともあれ、泉は一九四三年十二月六日付けで「京城帝国大学学生主事」「高等官七等」に任叙され^⑤、また一九四五年「八月二十七日」に大陸資源科学研究所の助教授に発令されたとされる（全京秀「京城学派の骨研究」と戦時人類学）。一方、『泉靖一著作集』に収録されている詳細なる「泉靖一《年譜》」には「八月二十七日、京城帝国大学法文学部助教授となる」^⑥ともある。

確かに『官報』（五五九〇号、一九四五年八月三十日付）をもって一

九四五年八月二十七日付けで助教授に任じられていることまでは確認できるが、「大陸資源文化研究所」への補職、あるいは法文学部での任用の如何に関しては、筆者は今のところそれを公的な記録で確認できていない。なお、『京城帝國大學學報』および「履歷書」（福岡市保健福祉局「博多港引揚資料」三七二）、および泉自身の回顧（『遙かな山やま』一九七一年）等に依拠して泉の京城帝大での勤務略歴を以下に示しておきたい。

※一九三五年三月、京城帝国大学予科文科B組修了

※一九三八年三月、京城帝国大学法文学部哲学科（倫理学専攻）卒業

一九三八年四月一日 任助手、法文学部勤務（「社会学宗教学」研究室）を命じられる

一九三八年十二月十日 依願免本官

※一九三八年十二月二十日 入営（旭川・第七師団・輜重兵連隊勤務）

※一九四一年十二月二十日 除隊

一九四一年十二月二十日 任助手兼書記、理工学部勤務・学生課勤務を命じられる

一九四二年七月一日 免兼官、兼任学生主事補

同 十二月一日 免本官、専任学生主事補

※一九四二年十二月十八日～一九四三年六月十七日

ニューギニア方面出張（海軍省・ニューギニア政府事務嘱託）

※一九四三年六月十八日～十二月十七日 ニューギニア方面出張延期

一九四三年十二月六日 任学生主事、叙高等官七等

一九四四年四月五日 京城帝国大学陳列館参与嘱託

十月十一日 理科教員養成所講師嘱託

一九四五年一月十五日 同講師解嘱

六月五日 大陸資源科学研究所事務嘱託

八月二十七日 任京城帝国大学助教、叙高等官七等

ところで、右に見る泉靖一の履歴から、逆に一次史料が極端に乏しい戦時末期における京城帝大の学事に関するいくつかの事項を読み取る事が可能である。

まず、泉は「社会学」の専攻であったと書かれることが多い。確かに、彼の指導教官は、法文学部「社会学講座」担任の秋葉隆である。そして、秋葉は「哲学科」に所属する教員であった。しかし、哲学科に置かれた専攻は「哲学」「倫理学」「教育学」「支那哲学」「心理学」「美学美術史」「宗教学」であり、長らく「社会学」の専攻は置かれていなかった。ようやく独立した専攻となったのが一九四三年度からのことである。

よって、「済州島―その社会人類学的研究」と題した卒業論文を書いたとされる泉であるが、卒業した専攻は、あくまでも「倫理学」であり、法文学部の規定上、「社会学」は倫理学専攻の授業科目の一つであった。ただし、年譜等の記述に混乱を及ぼしている一つの理由が、帝国大学の「小講座制」に基づきつつも、制度上の裏付けは曖昧な「研究室」の存在である。通常、講座を担任する教授、講義を担当（まれに講座を担当、ないしは分担）する助教、そして助手までは勅令で公布される官制に基づいており、明確な定員が決まっていた。しかし、学生の上、

あるいは研究に伴う事務手続きの執行のためにも「研究室」とは必要不可欠のものであった。

しかし、主として予算の都合上、教授・助教授・助手が揃った完全講座は、京城帝大では医学部を除き、あまり存在しなかった。よって四十九の講座を有した法文学部において、助手の数は一九四二年現在でわずか十三名である。また法文学部内において学生数は圧倒的に法科の方が多く、文科系講座への助手の配置は極めて限られていた。よって研究室の事務は、定員外の副手や、嘱託・雇たちによって支えられていた。

そこで、言わば苦肉の策として登場したのが、講座を超えた共同の研究室の運用であった。とりわけ共通の図書資料を共有しうる「朝鮮史」と「朝鮮語朝鮮文学」、「国史」と「国語国文」、あるいは「支那哲学」と「支那文学」など学科を跨いだ組み合わせが可能となっていた。また、京城帝大においては講座や専攻が存在しない「考古学」も、朝鮮史学第一講座の担任でありつつも考古学の講義を受け持った藤田亮策が美学美術史に間借りする形で「美学考古学研究室」として、欧米式に運営されていたのは興味深い。

とりわけ、宗教学宗教史講座の赤松智城と社会学講座の秋葉隆は、言わば「名コンビ」を組んで久しく満洲方面のシャーマニズム調査を行っていたこともあり、おそらく自然な流れとして「宗教学社会学」研究室が成立したのであった。そして、泉は同研究室付の助手であった。

さらに「陳列館」についてである。

赤松・秋葉による数次の満蒙調査で持ち帰られた文物は、当初は法文学部の部内措置によって「民俗参考室」が置かれ、同室にて保管されて

いた。さらに鳥山喜一や藤田亮策による渤海古蹟の発掘調査による出土品も加わり、正式に大学「陳列館」へと昇格したのであった。そして、一九四二年九月に開館式を挙行しているが、実質上の館長職である「主任」には秋葉隆が就任し、「参与」という名称での運営委員の委嘱（一九四二年五月一日付）は以下の通りであった（括弧内は筆者―永島による補記）。

鳥山 喜一（法文学部教授・東洋史学第二講座）
藤田 亮策（法文学部教授・朝鮮史学第一講座）
大澤 勝（医学部教授・薬理学第一講座）
今村 豊（医学部教授・解剖学第三講座）
船田 亨二（法文学部教授・羅馬法講座）
矢崎 美盛（法文学部教授〔兼九州帝大教授〕・美学美術史講座）
秋葉 隆（法文学部教授・社会学講座）
鈴木榮太郎（法文学部助教授・「社会学」講義担当）

高等官たる学生主事に昇任した泉靖一も、一九四四年春からこの運営陣の列に加わったということになろう。陳列館の業務遂行にあつて「宗教学社会学研究室」がその中心となったことは明らかである。

さらには、右のメンバー中、今村・秋葉が大陸資源科学研究所の発足に至つてはその所員となっている人事の流れにも注目しておきたい。また、泉は当初より研究所の事務を委嘱され、さっそく内蒙古への調査に赴いていた。そして「八月十五日」を跨ぎ、助教授に昇任したのであつ

た。

「満蒙文化」から「大陸文化」へ

ここで少し時間を遡らせたい。一九三八年春、京城帝大・大陸文化研究会は、法文学部教授（法理学講座）の尾高朝雄を隊長として「蒙疆學術探検隊」を組織し、七月から九月にかけて張家口を集合地とする本格的な現地調査を敢行した。

同隊は「本部」「登山班」「學術調査班」「医療班」「撮影報道班」にて編成され、また學術調査班はさらに「経済学」「動物学」「植物学」「地理学」「地質学」の各分班から構成されていた。なお、これらの班分けは固定的なものではなく、例えば、登山班の班長は予科教授の竹中要が務め、助手の泉靖一やカメラマンの飯山達雄が班員であったが、他方、泉は経済班にも属し、また竹中は植物学班にも所属する体裁をとっていた。¹¹⁾

そもそも、こうした自然科学分野までを巻き込んだ「蒙疆學術調査」の淵源を辿ると、実のところ、どうしても「泉靖一」の経歴に逢着してしまう。なんとすれば、泉が一九三三年四月に京城帝大予科に入学後、戦後は国立遺伝学研究所でのソメイヨシノの遺伝解析で名を高らしめる竹中要（一九〇三―一九六六）¹²⁾に顧問就任を依頼したことに始まる「予科スキー山岳会」の結成が、ひいては蒙疆への「探検調査」に直結していたのである。

泉靖一が「登山」の魅力に取り憑かれたのは、朝鮮総督府鉄道局に書記として勤務する傍ら、山岳撮影を得意とする写真家としても著名で

あった飯山達雄¹³⁾（一九〇四―一九九三）に伴われて一九三三年三月、予科入試の可否が判明する前の段階で、外金剛の集仙峰に登攀したことがきっかけであったという。¹⁴⁾ また、卒業論文の題材となる済州島への最初の旅行（一九三五年夏）も飯山の慫慂によるものであった。¹⁵⁾

一九三四年十二月から翌年一月にかけて、今西錦司を隊長とする京都帝国大学の山岳部が最新の登山技術を駆使して厳冬の白頭山を踏破¹⁶⁾したことが、大きな話題を呼んでいた。まもなく学部進学を控えた泉らが強烈な感化を受けたことは想像に難くない。¹⁷⁾

実際、泉は大学当局に掛け合い、学友会に山岳部を新設することの許可を受けるに至っていた。そして学友会山岳部・予科スキー山岳部は合同で各地の山々を回っていくことになるが、当初は文学科（国語国文学専攻）に入学したものの、登山の傍らで見聞していった社会学・民族学的な方面への関心を深め、第二学年からは哲学科（倫理学専攻）に移っている。そして、秋葉隆の下でまず取り組んだのが、一九三六年七月に大興安嶺東南部におけるオロチョン族の調査であった。この成果は澁澤榮三の斡旋により『民族学研究』（三巻一号、一九三七年一月）に掲載され、図らずも泉の中央学壇でのデビューをもたらすこととなった。

ちなみに、当時の『民族学研究』誌は、柳田民俗学の強い影響下、台北帝大出身の馬淵東一、のちに満洲の建国大学で教鞭をとる大間知篤三ら新進気鋭の民族学者たちが鎬を削る場所でもあった。泉が執筆した論文が掲載された号にも、のちに台北帝大・南方人文研究所助教授となる馬淵の論文が掲載されており、同号の巻頭を飾っている。

* * *

登山班の竹中要・泉靖一らは事前の調査（一九三八年二月）を経て、張家口から南下した察南自治政府管下の「小五台山」への登山調査を実行するに至っている。竹中によれば、この未踏峰たる小五台山行の計画は、すでに大学山岳部・予科スキー山岳部合同によって朝鮮半島北部・咸鏡南道に位置する「赴戦高原」への登山旅行の際に提起されたものであった。⁽¹⁸⁾

そもそも満洲事変が勃発し、さらに満洲国が成立した後、一九三三年一月に京城帝大教員・学生の有志によつて結成されたのが「満蒙文化研究会」であつた。そして、一九三七年七月の盧溝橋事件をきっかけに、「大陸文化研究会」に衣替えするとともに、各種の書籍・パンフレットの公刊を行い、また折にふれて開催された講演会は世上の人氣を博していた。特に、一九三九年九月から十一月にかけて、毎週三回のペースで「第一回大陸文化講座」⁽¹⁹⁾が開催され、延べ参加者は一九一八名に達したとされる。

京城帝國大學大陸文化研究會

大陸文化講座

學子注意
消息

에서는 오는九月七日부터 十一月八日까지 同大陸文化講座部 講臺에서 第一回大陸文化講座를 開催한다. 이 講臺의 宗旨은 制度上에서 學外의 人士를 歡迎하고 學識上 無條件에 合다. 講臺는 大部分 同大學 教授 助教에 의해 主로 大體의 文化政治經濟 當然에 대하여 經濟 水金 金曜日에 限해서 午後三時부터 四時까지 講臺한다. 이로서 申稱方은 往復葉書에 住所氏名年齡職業을 附해서 보내면 된다. 合한다.

七四五名の聴講者を集めた。加えて、六月に入ってからラジオによる放送も²⁰組まれるなど、帝国大学が実施するイベントとしては、マスコミマでを巻き込んだ大掛かりなものとなっていた。

他方、同じく「帝國・日本」の主要外地である台灣においては、かねてより形質人類学・文化人類学としての「土俗学」研究が盛んであり、また欧文資料を涉獵しつつ日本史・東洋史研究の伝統を遵守した「南洋史学」の学問的な水準は高かった。戦時中の南方進出という時局の要請もあり、「文政」「医」「理農」というやはり複合形式の学部構成を持つ台北帝國大学においては、一九四三年三月十一日付け勅令第一二四号・一二五号によつて「南方人文研究所官制」と「南方資源科学研究所官制」という二つの附置研究所の設置が認められていた。

この掣に習えば、京城帝大にも「大陸文化研究所」と「大陸資源研究所」が設置されてしかるべきである。しかし、実際には両者を折衷した

かのような名称の附置研究所に落ち着いている。それでも、同じく法学部を有しながらも、ついに文系の附置研を持ち得なかった東北帝大・九州帝大と比較して、京城帝大が有したアドバンテージということにおいては、「大陸ニ存スル唯一ノ帝國大學²¹」とその設置認可申請に際して謳ったように、やはり満洲・蒙古・北支との連絡という地政学的な優位は揺るぎなきものであった。

当時の京城帝大は全教官が赴任前にそれぞれ三ヶ年のヨーロッパ留学を了えて着任されるということで、全学が未だヨーロッパ気分が抜けないまま講義されるというきわめて特異な状態にあった。世界の新しい傾向はそのまま生の形で講壇に持込まれ、おそらく日本の中で一番新しい学風につつまれた大学だった。(津田剛、一九七二年)²²

右に引用した文章は、法文学部の卒業生による哲学科を回顧する文章の一節である。あくまで哲学科、特に恩師である宮本和吉にまつわる一文ではあるものの、ヨーロッパと地続きである大陸の東端に位置する京城帝国大学は、ユーラシア大陸唯一の帝大であると呼ばれ、また自らもそう自負していた。

蒙疆調査、あるいはこの実績を下敷きにした附置研究所の設置も、つまるところ「皇軍」の威を借り、国策と時流に便乗したと言えば、もちろん、それまでのことである。ただし、所長に就任した医学部の今村豊をはじめ、複数分野の研究者を横断的に巻き込む形での共同研究が企画

され、それに予算がつけられるというのは、何やら戦後日本の国立大学を取り巻く状況を先取りしている感が強いのである。

京城帝大と西ニューギニア調査

さて、先に見た泉靖一の履歴中には、海軍省の嘱託として赴いた西ニューギニアへの出張の項目がある。大陸資源科学研究所の基礎となったものは、すでに述べたように、満蒙文化研究会・大陸文化研究会以来の満蒙／蒙疆における各種の調査活動であったとされることが多い。

ただ、それ自体が間違いではないものの、コデーネーターたる泉靖一、あるいはその盟友たる鈴木誠・田中正四といった京城帝大医学部出身の若手学究がこぞって参加した西ニューギニアにおける資源調査に付随する形で実施された人類学的調査も、彼らの活動ぶりを世に知らしめる大きな要素であった。

なお、「海軍ニューギニア調査隊」は、マノクワリに拠点を置いた海軍省南方政務部麾下のニューギニア民政府の下で、田山利三郎(東北帝大理学部助教授・地質学)を隊長に、第一班から第六班に分かれて地質・鉱物・農業・植物・民族・動物・測量などの広範囲の調査を行った。

これらの調査隊には、東北帝大、京都帝大、京城帝大などの研究者に加え、宇都宮・岐阜の両高等農林学校教授、東京科学博物館、満洲国立博物館、南洋庁などから派遣された職員、さらには南洋興発、日本発送電、浅野セメント、王子製紙の社員なども参加した。加えて、朝鮮・京城からは朝鮮総督府地質調査所の技師が帯同し、あるいは鉄道局書記の飯山達雄が専属カメラマンとして加わっていた。

さて、海軍ニューギニア調査隊は、帰還後に詳細な報告書を作成して、関係方面に配布していたが、これとは別個に、泉靖一は鈴木誠との共著で調査隊のスポンサーである太平洋協会の「南太平洋叢書」の一冊として『西ニューギニアの民族』（日本評論社、一九四四年一月）を上梓している。また、これに先立ち、京城帝大で報告会²³をもち、さらには朝鮮で発行されていた月刊誌『興亞文化』に「西ニューギニア原住民の経済生活」と題したレポートを連載²⁴している。

一方、田中正四も「暗黒大陸の點描」「ビヤック島とヌンホール」に題した日記形式の紀行文を残している。この両篇は『瘦骨先生紙屑帖』（金剛社、一九六一年八月）という戦後の回想録に収録されているものである。同書は、日本人の朝鮮引揚げ、ないしは京城帝大の終焉にまつわる貴重な資料として知られるものである。そしてまた、西ニューギニア調査に関しても、戦時末期にもかかわらず軽妙な文体であり、しかも「楽屋オチ」「ゴシップ」的な内容を多く含んでいることから、公的な報告書からは漏れてしまう得がたい情報がふんだんに含まれている。

それだけに後年の潤筆が疑われるところではあるものの、「暗黒大陸の點描」の初出とされる『朝鮮行政』誌²⁵が近年においてゆまに書房から影印復刻されていることから、記事を対照してみたところ、筆者による追記が施されている部分を除き、ほぼ初出のままで内容の改変は行われていないことが確認できる。

ただし、復刻版は一九四四年四月号までであるのに対して、『瘦骨先生紙屑帖』にはさらに一編分が収録されており、『朝鮮行政』誌の一九四四年六月号あたりまで連載が継続していた可能性が高い。実際に筆者

（永島）が確認できた復刻版には未収録の『朝鮮行政』一九四四年五月号には、連載第八回目の文章が掲載されている。

さらに、五月十四日～六月三十日分の身辺雑記である「ビヤック島とヌンホール」に関しては初出が『興亞文化』誌であるとされる。『瘦骨先生紙屑帖』版には「序」に「（昭和二十年一月追記）」とあることから、一九四五年二月号以降に掲載されたと思われるが、『興亞文化』誌は、一九四五年一月号までしかその現物が確認されておらず、その詳細の解明は今後の調査に俟ちたい。

なお、田中正四は泉と生年を同じくし、京城中学校・京城帝国大学予科・京城帝国大学を通じての学友であり、同大卒業後は医学部で助手を務めていた人物である。専門は公衆衛生学であり、一九四二年八月には城大教授の尾高朝雄の斡旋によって岩波書店より『土幕民の生活・衛生』を上梓し、学界の注目を集めていた。

それとともに、当時は学生主事補を務めていた泉靖一と組んで、結核予防の集団検診を大学で実施²⁶し、また西ニューギニア調査でも血液型・人口に関する資料整理を行うことにより、泉をサポーターしていた。こうした関係は、敗戦後の引揚げ援護業務を担うようになってからも継続していたのである。

大陸資源科学研究所の組織構成

以下、ここで改めて大陸資源科学研究所の組織的な構成を整理することにした。そこで、まずは以下に「大陸資源科学研究所官制」の全文を掲げておきたい。

朕大陸資源科学研究所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和二十年六月四日

内閣總理大臣 男爵鈴木貫太郎

内務大臣 安倍源基

勅令第三百三十六號

大陸資源科学研究所官制

第一條 京城帝國大學ニ大陸資源科学研究所ヲ附置ス

第二條 大陸資源科学研究所ハ朝鮮、満洲、支那等ノ大陸諸地域ニ於ケ

ル天然資源ノ開發ニ關スル科學上ノ調査研究ヲ掌ル

第三條 大陸資源科学研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

所員

助手

書記

第四條

所長ハ京城帝國大學教授ノ中ヨリ朝鮮總督之ヲ補ス

所長ハ京城帝國大學總長ノ監督ノ下ニ於テ大陸資源科学研究所

ノ事務ヲ掌理ス

第五條 所員ハ京城帝國大學ノ教授助教ノ中ヨリ朝鮮總督之ヲ補ス

所員ハ所長ノ監督ノ下ニ於テ研究ヲ掌ル

第六條 助手ハ專任二人判任トス上司ノ指揮ヲ承ケ研究ニ従事ス

第七條 書記ハ專任一人判任トス上司ノ指揮ヲ承ケ事務ニ従事ス

第八條 京城帝國大學教授ニシテ所長又ハ所員ニ補セラレタルモノニハ

講座ヲ擔任セシメザルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ講座ヲ擔任セザル教授及所員ニ従事スル

助教ハ通ジテ四人トシ京城帝國大學ノ定員外トス

附 則 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

京城帝國大學高等官俸給令中左ノ通改正ス

第二條中「又ハ高地療養研究所長」ヲ、「高地療養研究所長又

ハ大陸資源科学研究所長」ニ改ム

第三條ノ二及第五條ノ二中「高地療養研究所員」ノ下ニ「又ハ

大陸資源科学研究所員」ヲ加フ

官制公布に先立ち、内務省との予算折衝や法制局との調整の段階で作成されたとおぼしき文書によれば、大陸資源科学研究所の配置人員は以下のようなものであったとされる。

大陸資源科学研究所の機構と職員配置予定表

(括弧内は兼任者を示す⁽²⁸⁾)

| 機 構 | 教授 | 助教授 | 助手 |
|-----------------------|-------|-------|-------|
| 第一部 (地下資源) | | | |
| 地質及鉱物の調査研究 | 1 (1) | | 1 (1) |
| 地球化学及放射能作学的調査研究 | (1) | 1 | 1 |
| 物理探鉱ノ研究及応用 | 1 | (1) | 1 |
| 鉱床及鉱山学上の調査研究 | (1) | (1) | (1) |
| 第二部 (地上資源) | | | |
| 気候風土生物に関する地理学的調査研究 | (1) | 1 | 1 |
| 土壌の地球物理学に関する調査研究 | (1) | | (1) |
| 河川、運河、水力、電力に関する調査研究 | (1) | (1) | (1) |
| 第三部 (総務) | | | |
| 調査研究の企画及総合 | } (2) | } (2) | } (2) |
| 資料文献の調査及整理 | | | |
| 資源開発上必要なる人的資源に関する調査研究 | | | |
| 其の他他部の所掌に属せざる事項 | | | |

〔計〕 2 (8) 2 (5) 4 (6)

なお、『朝鮮總督府官報』五五〇二号 (一九四五年六月八日付) によれば、一九四五年六月五日付けで以下の補職発令がなされたことが確認

できる。

まず、所長 (所員も兼務) には医学部教授の今村豊 (解剖学) が発令された。教授職の所員としては以下の九名が就任した。

秋葉 隆 (法文学部教授・社会学)
 天野 利武 (法文学部教授・心理学)
 佐藤 武雄 (医学部教授・法医学)
 北村 精一 (医学部教授・皮膚科学泌尿器科学)
 木野崎吉郎 (理工学部教授・鉱物地質学)
 岩瀬 榮一 (理工学部教授・化学)
 安宅 勝 (理工学部教授・土木工程)
 村上 恵一 (理工学部教授・応用化学)

また、助教授職の所員には以下の五名がそれぞれ任じられた。

森谷 克己 (法文学部助教授・社会政策)
 保柳 睦美 (法文学部助教授・地理学)
 伊藤 俊夫 (法文学部助教授・農業政策)
 堀部 富男 (理工学部助教授・鉱山学)
 永井莊七郎 (理工学部助教授・土木工程)

なお、教授の人員に一名の超過がみられるものの、ほぼ定員に沿った配置であったと言えよう。ただし、どの「部門」の張り付きになったか

どうかは今のところ資料上の確認が困難である。また、教授・助教授合わせて、法文五名・医三名・理工六名からなる人員の案配でもあった。

それでも一九四五年七月二七日付けで九州帝国大学助教授（理物理学部物理学科）から京城帝大教授に転任（ただし交通途絶により未着任）した吉山良一（地震学）の人事は、専任教授二ポスト中の一であった可能性が高い。一方、属（判任）である助手・書記らの具体的な配置状況も今となつては復元が困難であるが、附属図書館司書の上床一男が大陸資源科学研究所の書記に配置換えになっていたことが、本人の回想³⁰によつて明らかである。

また、敗戦後に助教授に昇任した泉靖一のポストも、配置定員上は相応しいものが見当たらないが、先に見た「大陸資源科学研究所官制」の第八条、すなわち「講座ヲ擔任セザル教授及所員ニ從事スル助教ハ通ジテ四人トシ」に続く「京城帝國大學ノ定員外トス」の規定に基づくものであった可能性が高い。

さらに注目すべきは、一九四五年七月十三日付で教授に任用され、大陸資源科学研究所員に補されている金鍾遠の人事である。過去、医学部において短期間ながら助教授が、あるいは予科教授・理科教員養成所教授（いずれも大学の助教授相当）に採用された例はあるものの、おそらく金鍾遠は、京城帝大としては最初で最後の朝鮮人教授である。

金鍾遠は、松山高専学校から東京帝国大学理物理学部地質学科に進み、一九三一年三月に卒業するという経歴を有した人物である。大学卒業後は一時期、九州帝大工学部の大学院（鉱床学に関する研究）一九三七（三八年頃）に在籍したこともあり、その後は朝鮮鉱業振興株式会社で

技師を務めていたが、戦時最末期に京城帝大教授に採用され、そのまま米軍政下の「京城大学」理工学部教授を経て、ソウル大学校文理科大学理学部地質学科の教授となっていた。

特にソウル大の創設初期において、理工学部から「工」が切り離され、京城工業専門学校・京城鉱山専門学校とともに「工科大学」が設置される一方、「理」は文理科大学「理学部」の母体となった。ただし、旧理工学部には「数学」「生物学」と「地質学」の科目に対応する学科・専攻は置かれていなかった。そこで、この三学科においては故国に帰還してきた日本「内地」の帝国大学理学部出身者³⁴を中心に教員として採用していったのであった。さらに、学業の途中で朝鮮半島に戻ってきた学生が京城大学に編入し、一九四六年七月の卒業後は、そのまま大学に残つて教壇に立つ者も少なくなかった。

こうしてみると、あくまでも結果的な話ではあるものの、京城帝国大学・大陸資源科学研究所、ないしは理工学部における関係講座の人材配置は、少なくとも「解放」後の京城大学・ソウル大学校における地質学・鉱物学をはじめとする自然科学系の人材を供給することに、図らずも一役買つていたと言えるであろう。

おわりに

大陸資源科学研究所は、設立から間もない一九四五年七月から八月初旬において研究所としては最初の（そして最後の）満蒙調査³⁶を実施したが、ソ連軍の進駐、および敗戦の報を受けて、急ぎ京城に戻ることもなかった。

そして、泉ら城大関係者は「日本人世話会」において、特に救療活動に従事し、それは博多港引揚げ後の「聖福病院」の運営や、引揚げ・戦災孤児を収容した「いずみ保育園」の経営まで続いていくことになる。³⁷⁾この病院経営をめぐる旧京城帝大医学部関係者（および学生が多く編入した九州大学医学部）が関与していたことについてはこれまでもしばしば言及されてきている。しかし、むしろ泉靖一らを含んだ「大陸資源科学研究所」旧メンバーの働きであったと見るのが、より実態に近いのである。

ともあれ、京城帝国大学、とりわけ大陸資源科学研究所に集った「学知」は、戦後の日本、あるいは韓国に限定的とは言えども持ち越されることになった。特に「京城学派」の異名を有した人類学の分野に関しては、再検討が進んでいる。しかしながら、大陸資源科学研究所が構想していた研究内容からすれば、学派の範囲はもう少し拡大して捉えるべきなのかもしれない。筆者の課題としては、研究所のメンバーとして発令された研究者たちを中心にして京城帝大の理系研究者の履歴と業績を、戦前と戦後とに跨がって、いま一度洗い直す作業が残っている。これを持つてから、あらためて「京城学派」なるものの存否を問うていくことにしたい。

注

- (1) 拙稿「帝国大学『法文学部』の比較史的検討―内外地・正系と傍系・朝鮮人学生―」（『九州史学』一六七、二〇一四年三月）。
- (2) 長崎県出身、第五高等学校（第三部医科）・京都帝国大学医学部を卒業後、京

城医学専門学校を経て一九二六年に京城帝国大学医学部助教授に着任する。一九二九年に教授昇任。戦後は厚生技官として博多引揚援護局の検疫課長を務め、さらに広島記念病院勤務を経て広島県立医科大学・新潟大学医学部・三重県立医科大学にて教鞭をとった。

- (3) 全京秀（宮原葉子訳）「京城帝国大学の学術調査と『京城学派』の誕生」／『朝鮮学報』二一四、二〇一〇年一月、同「京城学派の人骨研究と戦時人類学」／酒井哲哉・松田利彦編『帝国と高等教育』国際日本文化研究センター、二〇一三年三月。この他、中生勝美「植民地大学の人類学者…泉靖一論」（『国際学研究』〈桜美林大学〉五、二〇一五年三月）など、やはり人類学史からのアプローチによる研究が目下のところ主流を占めている。

- (4) 泉靖一『遙かな山々』（新潮社、一九七一年一月）同書二〇五～二〇八頁。

- (5) 『朝鮮總督府官報』五〇六三号、一九四三年十二月十七日付。

- (6) 『泉靖一《年譜》』（『泉靖一著作集』七、読売新聞社、一九七二年十二月、同書四四三頁）。

- (7) 『京城帝國大學學報』一三四（一九三八年五月五日付）・『同』一四二（一九三九年一月六日付）・『同』一七八（一九四二年一月五日付）・『同』一八五（一九四二年八月五日付）・『同』二〇二（一九四四年一月五日付）の各「叙任及辭令」欄。

- (8) 資料によっては「宗教学社会学」と宗教学が筆頭となる記載もしばしば見受けられるが、ここでは『京城帝國大學學報』一三四（一九三八年五月五日付）の「叙任及辭令」欄での表記に依る。

- (9) 『京城帝國大學一覽昭和十七年』（一九四三年三月）同書一八八・一八九頁。

- (10) 『京城帝國大學學報』一八三（一九四二年六月五日付）の「叙任及辭令」欄。

- (11) 京城帝国大学大陸文化研究会編『蒙疆の自然と文化——京城帝国大学蒙疆學術探検隊報告書——』（古今書院、一九三九年六月）。
- (12) 『岳花酒仙——竹中要博士追悼集——』（私家版、一九六九年十一月）。
- (13) 飯山は、泉や竹中らの調査に毎回のよう同行するとともに、『蒙疆の旅』（三省堂、一九四一年一〇月）・『朝鮮の山』（朝鮮山岳会、一九四三年七月）などの書籍を上梓し、撮り溜めた多数の写真を公表している。また、戦後は「日本人引き揚げ」にまつわる同行取材によって貴重な写真を数多く撮影している（『小さな引揚者』草土文化、一九八五年八月）。自身の引揚げに関しては『バガボン』12万キロ（富山房、一九六二年十二月）に詳しく述べられている。
- (14) ただし、この前年である一九三二年七月には友人と連れ立って金剛山の彩霞峰に登っており（原正典・泉靖一「金剛山彩霞峰初登攀」／『朝鮮山岳』二、一九三二年一二月）、すでに京城中の生徒時代には登山への関心の萌芽が明確にあった模様である。
- (15) 飯山達雄「少年時代の靖一君」（『泉靖一著作集』三〔月報六〕、一九七二年一〇月）。
- (16) 『白頭山京都帝国大学白頭山遠征隊報告』（梓書房、一九三五年九月）。
- (17) やや後年のことに属するが、専門雑誌『探検』が創刊された際（一九四二年八月）、同誌は巻頭に今西錦司の「探検の前夜」と題した文章を置くとともに、続いて泉靖一の「探検隊における輸送の問題」を掲載しているように、登山・山岳探検の世界において「城大の泉」の名は、京大の今西錦司や梅棹忠夫らと対置される存在となっていた。こうした京都帝大と京城帝大のライバル関係を踏まえた「泉靖一論」に関しては、梅棹忠夫「泉靖一における山と探検」（泉靖一前掲『遙かな山々』に収録）を特に参照されたい。
- (18) 竹中要「小五臺山登攀」（『山岳』（日本山岳会）三四年二号、一九三九年一月、同誌一〇九・一一〇頁）。また、小五台山登山に関する具体的な日程と内容に関しては、上掲の竹中の文章とともに、泉靖一「小五臺山登攀記」（前掲『蒙疆の自然と文化』所収）にも詳しい。
- (19) この時の講義録として出版された『大陸文化研究』（岩波書店、一九四〇年七月）によれば、①「国家の目的と大陸経営」（尾高朝雄）・②「東亜新秩序の建設」（森谷克巳）・③「北アジア史概論」（島山喜一）・④「北アジア人種概論」（今村豊）・⑤「北アジアの民俗」（秋葉隆）・⑥「支那民族性論」（天野利武）・⑦「西域文化史概論」（大谷勝真）・⑧「支那仏教史論」（佐藤泰舜）・⑨「支那幣制論」（鈴木武雄）・⑩「満洲産業の開発過程」（静田均）・⑪「満洲国財政の特質」（小田忠夫）・⑫「内蒙古に於ける農耕地帯と遊牧地帯の境界線とその移動」（多田文男）・⑬「日満の人口問題」（水島治夫）・⑭「漢方医学思想に就て」（杉原徳行）・⑮「北亜細亜の動物」（森為三）・⑯「北亜細亜の植物資源」（石戸谷勉）・⑰「満洲及北支の伝染病及寄生虫病」（小林晴治郎）・⑱「東亜経済地理」（大内武次）・⑲「所謂北方文化に就て」（藤田亮策）・⑳「清朝文化と李朝学人」（藤塚鄰）・㉑「英支交渉史」（奥平武彦）・㉒「支那近代小説論」（辛島驍）といったラインナップ（順不同）であった。
- (20) 「大陸文化講座」라디오로放送（『毎日新報』一九四一年六月五日付夕刊二面）。
- (21) 「大陸資源科學研究所ノ緊急ヲ要スル理由」（『公文類聚』第六九編・昭和二〇年・第二九卷・官職二三・アジ歴レファレンスコード：A03010231200所収の附属文書）。
- (22) 津田剛「有限と無限の間——ある哲学教師の遍歴——」（『哲学論叢』（宮崎大学哲

学研究会」一〇、一九七二年一月、同誌四頁。

- (23) 京城国際文化協会と日本社会学会の共催による「南方調査特別報告会」が一九四三年一〇月一〇日に京城帝大法文学部大講堂で開催されるなど、話題を呼んでいた(「私の齢は旦那任せ」京城大教授の興味ある調査報告)／『京城日報』一九四三年十月十一日付朝刊二面)。

- (24) 泉靖一「西ニューギニア原住民の経済生活 ニューギニア調査中に逝ける亡き父に捧ぐ」(『興亞文化』九巻四号、一九四四年四月)。同文の締めくくり部分に「つゞく」とあることから、翌月号以降も続いたと考えられるが、同誌一九四四年五〜七月号は未見のため、詳細は未詳である。なお、『興亞文化』およびその前身誌である『緑旗』については、拙稿『《緑旗》とその時代―影印復刻版『緑旗／興亞文化』誌の解題に代えて』(『緑旗別巻索引(記事・人名)』オークラ情報サービス、二〇〇九年九月)を参照されたい。

- (25) 以下の記事が確認される。「暗黒大陸の點描 ニューギニア調査隊に参加して」(二二巻八・九合号、一九四三年九月)／「暗黒大陸の點描(二) ニューギニア調査隊に参加して」(二二巻一〇号、一九四三年一〇月)／「暗黒大陸の點描(三) ニューギニア調査隊に参加して」(二二巻一一・一二合号、一九四三年一二月)／「暗黒大陸の點描(四) ニューギニア調査隊に参加して」(二三巻一号、一九四四年一月)／「暗黒大陸の點描(五) ニューギニア調査隊に参加して」(二三巻二号、一九四四年二月)／「暗黒大陸の點描(六) ニューギニア調査隊に参加して」(二三巻三号、一九四四年三月)／「暗黒大陸の點描(七) ニューギニア調査隊に参加して」(二三巻四号、一九四四年四月)／「暗黒大陸の點描(八) ニューギニア調査隊に参加して」(二三巻五号、一九四四年五月)。

- (26) 田中正四・泉靖一「集團検診の必要とその實際―京城帝國大學保健所に於け

る一例―」(『朝鮮行政』二二巻六号、一九四二年六月)。

- (27) 『官報』第五五一六号(一九四五年六月五日付)。

- (28) 「大陸資源科學研究所ノ機構及職員配置豫定表」(前掲『公文類聚』第六九編・昭和二〇年・第二九巻・官職二三・アジ歴レファレンスコード:A03010231200所収の附属文書)を基に、漢数字をアラビア数字に入れ替えるなど、筆者が適宜に補訂を加えた。

- (29) 『朝鮮總督府官報』五五五四号(一九四五年八月八日付)。なお、吉山は任地に赴くことなく敗戦を迎え、九大に復歸したのちに、東京大学地震研究所に転任している。

- (30) 上床一男「大陸資源科學研究所」(紺碧遙かに―京城帝國大學創立五十周年記念誌一九七四年一〇月、同書七〇〜七二頁)。

- (31) 『朝鮮總督府官報』五五四四号(一九四五年七月二十七日付)。

- (32) 高永珣(大阪医大出身、在職…一九二八年十二月二十四日〜同二十六日)と、尹日善(六高―京都帝大医学部出身、在職…一九二八年三月三十日〜一九二九年四月十八日)の二人である。また尹泰東(六高―東京帝大文学部出身)が一九三四年七月二十五日から同年十一月十七日まで予科教授に任用されており、さらに金志政(佐賀高―東京帝大理学部出身)が一九四五年七月二十五日付けで理科教員養成所教授に採用されている(『朝鮮總督府官報』五五五三号、一九四五年八月七日付)。

- (33) 一九四〇年六月に制定された「朝鮮鑛業振興株式會社法」にもとづき、朝鮮總督府の「重要鉱物増産」の中心を担うべく設立された特殊会社であるとともに、各地に直営の鉱山を保有していた(『朝鮮産業の共榮圈参加體制』(『年刊朝鮮』昭和十七年版)東洋經濟新報社京城支局、一九四二年五月、同書九六頁)。

(34) 筆者が確認しえたのは以下の人物たちである。崔浩英（京城高等工業学校―九州帝国大学工学部冶金学科（一九三二年卒）を経て朝鮮総督府技師（殖産局燃料選鉱研究所）、孫致武（宇都宮高等農林学校―北海道帝国大学理学部地質学鉱物学科（一九四一年卒）、鄭昌熙（大同工業専門学校―北海道帝国大学理学部地質学鉱物学科（一九四四年卒））。

(35) 地質学科関係者としては以下が確認される。金鳳均（大同工業専門学校―台北帝国大学理学部地質学科―京城大学理工学部鉱山冶金学科編入（一九四六年卒）、尹碩圭（京城鉱山専門学校―九州帝国大学理学部地質学科―京城大学理工学部鉱山冶金学科編入（一九四六年卒）、鄭鳳日（旅順高等学校―東北帝国大学理学部地質学科―ソウル大学校文理科大学地質学科編入（一九四八年卒））。

(36) この時に学生隊員として参加した相馬廣明氏の回想（『ヒマラヤへの道』診断と治療社、一九九三年一月）、あるいは岩永知勝氏へのインタビュー（高杉志緒『日本に引揚げた人々』図書出版のぶ工房、二〇一一年一月）などによって調査から引揚げまでの概要を知り得る。

(37) 詳しくは、拙稿「朝鮮半島からの引揚と『日本人世話会』の救護活動―朝鮮総督府・京城帝国大学関係者を中心に―」（増田弘編著『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』慶應義塾大学出版会、二〇一二年一月）を参照されたい。

【参考】京城帝国大学法文学部・文科系講座担任者の変遷

一九二四 一九三三 一九三六 一九三七 一九三八 一九三九 一九四〇 一九四一 一九四二 一九四三 一九四四 一九四五

| | | |
|----------|-----------------------------|--------------------------|
| 国史学第一講座 | 田保橋潔 (教授昇任) (講座担当) | |
| 国史学第二講座 | 松本重彦 | |
| 東洋史学第一講座 | 大谷勝眞 | 松田壽男 (講座担任) (教授昇任) |
| 東洋史学第二講座 | 鳥山喜一 | |
| 朝鮮史学第一講座 | 小田省吾 (法文教授) (講座担任) | 末松保和 (教授昇任) |
| 朝鮮史学第二講座 | 今西龍 (文科部長) (一九三三・三退官) | 藤田亮策 (教授昇任) |
| 西洋史学講座 | 金子光介 (教授昇任) (講座担任) | 高橋幸八郎 (講座担任) |

| | | |
|------------|-----------------------------|--------------------|
| 哲学・哲学史第一講座 | 安倍能成 (田邊重二) | 田邊重二 (教授昇任) |
| 哲学・哲学史第二講座 | 宮本和吉 | |
| 倫理学第一講座 | 島本愛之助 (一九三三・九卒) | 小島軍造 (教授昇任) |
| 倫理学第二講座 | 白井成允 | 宮島克一 (一九四五・四退官) |
| 支那哲学講座 | 藤塚 鄰 | 阿部吉雄 (教授昇任) |
| 宗教学・宗教史講座 | 赤松智城 (手島文吉) (一九二二・五卒) | 佐藤泰舜 (教授昇任) |

| | | | |
|---------------|-----------------------------|---------------------|-----------------------------------|
| 朝鮮語学・朝鮮文学第二講座 | | 小倉進平 | (一九四三・三退官) (河野六郎 助教授・講座担任) |
| 朝鮮語学・朝鮮文学第一講座 | 予科 | 高橋亨 | (一九三九・四退官) |
| 支那語学・支那文学講座 | | 兒島獻吉郎 (一九三〇・一退官) | 辛島 驍 (教授昇任・講座担任) (一九四五・一退官) |
| 外国語・外国文学第二講座 | | (寺井邦男) | 中島文雄 (教授昇任・講座担任) |
| 外国語・外国文学第一講座 | | 佐藤清 | (一九四五・四退官) |
| 国語学・国文学第二講座 | | 時枝誠記 | (教授昇任) (一九四三・五転任) |
| 国語学・国文学第一講座 | | 高木市之助 (麻生磯次) | 麻生磯次 (一九四二・三転任) 齋藤清衛 |
| 社会学講座 | | 秋葉隆 | (教授昇任・講座担任) (鈴木栄太郎) |
| 教育学第二講座 | | 田花爲雄 (講座担任) | 松月秀雄 (教授昇任・兼任) |
| 教育学第一講座 | | 松月秀雄 | |
| 心理学第二講座 | | 黒田亮 (教授昇任・講座担任) | (一九四二・九退官) (和田陽平・予科教授) |
| 心理学第一講座 | | 速水 晃 | (一九六三・一総長就任) (天野利武) (講座担任) |
| 美学・美術史第二講座 | 田中梅吉(予科教授) (田中梅吉・予科教授兼任) | 田中豊藏 | (一九四二・四退官) (一九四四・三退官) |
| 美学・美術史第一講座 | | 上野直昭 | (一九四一・一退官) 矢崎美盛 (講座担任・九大教授) |

一九二四一九二五一九二六一九二七一九二八一九二九一九三〇一九三一一九三二一九三三一九三四一九三五一九三六一九三七一九三八一九三九一九四〇一九四一一九四二一九四三一九四四一九四五

**Keijo Imperial University and the Exploration of Mengjiang:
A Preliminary Consideration of the Establishment of the Tairiku Shigen
Kagaku Kenkyujo (Continental Resource Science Institute)
within Keijō Imperial University**

NAGASHIMA Hiroki

This paper, with regard to Tairiku Shigen Kagaku Kenkyujo (Continental resource science institute) set up by June 1945 within Keijō Imperial University, investigates and sorts out how the research center was established as well as the characteristics of assignment of the institute's personnel in time order, mainly through close examination of records on careers of teachers at the center.

How Seiichi Izumi, one of the leading Japanese cultural anthropologists immediately after the end of World War II, worked at Keijō Imperial University or elsewhere in Korea, has been recalled and discussed in various ways to date. However, many details regarding his status, the organization he belonged to then, and what he actually worked on, have still not been correctly ascertained or determined owing to the lack of relevant materials during the war. This paper expects to fill as many “blanks” in Izumi's career records as possible.

This paper also aims to recover information related to the personnel shuffling and assignment of not only Izumi but also other teachers at Keijō Imperial University in the closing months of World War II based on descriptions of personnel appointment in the gazette of the Government-General of Korea and Keijō Imperial University's bulletin; examine personnel and academic links among not only Keijō Imperial University but also Kyongsung University and Seoul National University, which were set up on the Korean Peninsula after the “liberation” of Korea; and study the continuous modality of their personnel handling.